❖連載小説❖

一葉恋慕

多谷昇太

（三）関東一文字清女

明治二十七年九月、薄紫色の小花が広い庭のそこかしこに咲き乱れている旧水戸藩御用達宿、今は「萩の舎」と門弟たちから呼ばれている、中島歌子の歌塾をあとにした一葉は、ややうつむき加減で安藤坂の通りを右へと上って行く。萩の花の花言葉である「思案」そのもののような思案顔をしてである。八年前の十五才の折り始めて歌子の門を叩いた時にも感じたことだが、主に華族や富裕階級の子女らを集めた華やかさと煌びやかさの中にあって、平民出身でしかない我が身の境遇をいまさらのように思い知らされていた。しかし八年前の当時は父則義がまだ存命中で、金融や不動産で成した財をいまだ保っていたので今ほどのみじめさはなかった。当時の住まいは帝大（東大）赤門前に４５坪の屋敷を構えていて「桜木の宿」と号し、すれば平民出身というよりはむしろ富裕層の出自と云えなくもなかったのである。

しかるにその父が事業に失敗して断腸のうちに他界してから早5年と4ヶ月が経つ。幕末時の武士・旗本の零落にも等しいような我が身の今の零落ぶりである。家に帰ればはたして現金は一円（いまの一万円に相当）でもあったろうか。母と妹を養わねばならず、また一年ほど前から訪問を受けるようになっていた青年文士たちへの賄い、すなわち飲食の提供もはからねばならない。かつて下谷の龍泉寺町で雑貨店を始めた折りの苦渋にも等しい、いやそれ以上のうっ屈の中に一葉はあった。当時も今ももしやを頼んで師匠中島歌子に借金を申し込もうとしたのだが、始めからそれと読んでいて警戒しているような歌子の様子に口に上すこともできなかった。八円というまとまった金を借りていた親友伊東夏子の姿もあったが、さらなる借金を頼むことなど論外である。その金や龍泉寺町の店をたたんだ金などをもって、丸山福山町にある今の借家に引っ越しをしたのだった。まがりなりにも雑貨店経営の収入があった四ヶ月前と違って今の一葉には現金収入の当てがほとんどない。萩の舎で助教を務めていてわずかの手当てを歌子からもらってはいたが、ほんの金一封程度でとても一家三人の糊口をしのぐには足らなかっ

た。伝通院を右に曲がり白山通りに向かう道すがら一葉の脳裏に「あの男…」と禁断の思いが浮かぶ。顕真術会の久佐賀義孝、さらには村上浪六などといったかつて借金を申し込んだ男たちのことが。

今の一葉はかつての一葉ではない。「うもれ木」のお蝶でもなければまして卯の花の娘でもない。「世の人はよも知らじかし世の人の知らぬ道をもたどる身なれば」と歌に詠んだ通りのいわば，修羅場，をくぐって来た身である。一面識もない身でいきなり男のもとへと借金を申し込みに行った。それほどに切羽詰まっていて後がなかったのだが、しかしたった今もご同様である。細くはあったが形のいい、意志の強そうな眉を寄せて、いやそればかりかうすら笑いさえも浮かべて、丸山福山町の我が家へと重い足をはこぶのだった。男と云えば一葉にとってのそれははっきり二種類、いや正確に云えば四種類あった。

女を支えるのは男の義務とでもするいわば金づるとしての男と、いま一方のそれははからずも交誼を得ることとなった青年文士たち、平田禿木や馬場孤蝶、戸川秋骨ら同人誌「文学界」の面々である。青雲の気概に充ちた彼らのことを思うとさきほどの自嘲的な笑みとはまるで違う、なんとも愛しげな、あたかも血肉を分けた弟たちを思うような、やさしげな笑みが一葉の顔に浮かんでくる。ひょっとして彼らのうちの一人でも来て居はしまいか、重かった歩調がいささかでも軽くなる一葉であった。あとの二種類の男については今は述べずに後述しよう。一葉の本地へと深く介入してくる二種類の男たち、なかんずく一種類ではあるからだ。

今の四車線もあるような広い通りとは比べものにならない、しかし人力車や荷車が行き交う白山通りを横切って本郷崖下の新開地へと入って行く。銘酒屋が立ち並ぶ、敢て云えばいかがわしい所へと、である。時刻は夕時で各銘酒屋の軒先には早くも女たちが立って、勤め帰りの職人たちや若旦那衆の袖を引いていた。どこかで見たような千陰流の達筆な筆跡で「御料理仕出し云々（しかじか）」と書かれている店の隣がわが家である。首尾を訊くだろう母や妹のことを思うと気が重い。ため息を吐いて二三軒前まで来た時にいきなり騒ぎが持ち上がった。「いやだ、触らないで！」と声を上げながら一人の酌婦（？）が表へと飛び出て来た。それを追ってかなり酩酊した風の男がすがりつく。「いいじゃねえかよ、いい玉のくせしてよ、なんで女給だけなんだよ。俺が買って

やろうって云って…」しかし男の手をはらいのけてその顔を女が叩いた。見ればかねてから一葉が気にしていた、異人のような顔つき身体つきをしていた若い女である。その女の母親が最近亡くなったのも一葉は知っていた。むろんお島だった。以前に彼女から直接「あたしはおっ母さんの云いつけを守る。ぜったい身体を売らない」なる言葉を聞いている。

一葉が外出する際に合わせるように掃き掃除などをよそおって表に出て来、挨拶などをしては話しかけたい素振りを見せていた。母親の葬儀のあとしばらくしてから始めて会話に応じた時、息せき切って「小説を書く偉い先生だって知ってます。あ、あたしは横浜の慰留地に居た者で、ち、父はアメリカ人で、だからこんな顔をしてるんです」と云ってははにかむ。聞かれもしないのに素性を述べ、なぜかこの自分を見ては高ぶっている…はてどこかで経験したような…とデ・ジャビ感が一葉を襲う。無論それは平田禿木や馬場孤蝶ら青年文士たちが初めて来訪した時に見せた高揚感とも似ていたが、一方でどこか違うような気もした。『横浜で?…大森で?』わけのわからない錯綜をおぼえたがしかしそれは別事である。とにかくその時以来そのようなお島の言動にいじらしさを覚え、且つ健気とも思っていたのだった。みずからが書いた小説「うもれ木」のお蝶のようだとも。でき得るなら更正への手助けでもしてあげたかったがこの身代では「覚束な」でしかなかった。

しかるに物事は待たない、人は待てないのであり、換言すれば一葉の人生そのものが容赦なく、いまこの時を自らに迫つているのだった。どうしようか、行って加勢しようかなどとも思うが身がすくむ。しかしええい、この意気地なしめとばかり意を決して歩を進めようとした刹那、こんなことには慣れっこといった風情でやり手婆のお蔦が間に入った。「よしなよ、この子はそっちの方はやらないんだよ。ほらほら近所の人（すなわち一葉）がきつい目で見てるじゃないか」と男をいなし、続けて店内の酌婦らに目配せをしたようだ。「ほら～さん、毛唐なんかにかまってないで戻りなよ。あたしがたっぷり相手をしてやるからさ」「お、俺はこの娘（こ）を…」かまわずに女が男の手を引き店内に引っ張り込んだ。まだ気がたかぶったままのお島にお蔦が「おまえもさ、いつまで生娘してるつもりなんだえ。客に手を出したりしてさ。どこを触ったなんて声を立てるんじゃないよ。そのうち旦那から暇出されるよ。出て行け

るもんならどこへでも行っちまっていいんだよ。ったく、いくらでも上客引けるだろうにさ…」と詰ってはしかし抜かりなく笑顔をつくり一葉に一礼して中へと入って行った。お島は一葉に目をやったあと両手で顔をおおってその場に泣きくずれてしまった。

全身で「なさけない、みっともない、はずかしい」と一葉に訴えているようだ。こんな目に会っても、いいように云われても所詮また店の中に、逃げ場のない、みずからの生死場へと戻って行かねばならない。まさにこの世は地獄であった。しかしここに、お島の姿に、一葉はみずからを見る。これにただなずろうべきや、抗はねばならない。今より三月ほど先の、世に云う奇跡の一年の内に執筆した傑作、「にごりえ」のお力にみずからを映じたごとく、お島の今を一葉は正しく把握した。義侠心とは違う、みずからの本地が誘うままに、さきほどすくんだ足をこんどは止まらせることなくお島のもとへと運んで行った。大柄のお島を抱き抱えるようにして立ち上がらせると、一葉は瀟洒な萩の花とは違う、ヨモギが生い茂った「よもぎふの宿」わが家へとお島を連れ込んで行った。「ただいま」声をかけた先にいる母お滝と、妹邦子の目が一葉を襲う…。

（続く）

負くるべしやは